

2 野 菜

項 目	作 業 内 容
(1) 果菜類の 管理	(今月の作業のポイント) ○果菜類の管理 ○いちごの育苗管理 ○台風・豪雨対策 ア 高温対策 夏場の雨よけハウスでは、ハウス内の温度が 40℃を超えることがあり、株の消耗や花質劣化による着果不良が発生する場合がある。そこで、ハウスの側面や妻面などをできるだけ大きく開放し、換気を良くするとともに、古葉や混み合った葉は適宜除去し、通風の確保に努める。 きゅうり、なす、ピーマンなどの露地果菜類では、株元に稲ワラや刈草を厚く敷き、地温の上昇や土壌の乾燥を抑制し根を保護する。 イ かん水・追肥・摘果 この時期のかん水は日中を避け、気温の低い朝夕に行う。 追肥は、草勢を見ながら、窒素成分で 2～3 kg/10a を 7～10 日おきに施用する。粒状肥料の場合、土壌が乾燥していると肥効が現れにくいため、施用後に適宜かん水を行う。 また、着果負担、高温、乾燥等により草勢の低下が見られる場合は、果実の若どりや奇形果（きゅうりでは極端な曲がり果や先細り果、尻太り果など）を中心に摘果を行い、草勢の回復に努める。 ウ 摘葉（葉かぎ） トマトやきゅうりでは、不要になった下位葉や、発病葉、過繁茂の部分などを適宜除去する。なお、傷口からの病原菌の侵入を防ぐため、葉かぎは晴天日の午前中に行い、夕方までに傷口の乾燥を図る。 エ 病虫害 晴天が続くとハダニ類、アブラムシ類、アザミウマ類等の発生が多くなるため、早期防除に努める。また、8～9月にかけては、果実を加害するオオタバコガやハスモンヨトウのほか、ハモグリバエ類などの発生が多くなるため、ほ場をよく観察して防除を徹底する。

項 目	作 業 内 容
(2) いちごの育苗管理	オ 生理障害 土壌の乾燥が続いたり、窒素施用量が多すぎたりすると、カルシウムの吸収が妨げられ、トマトやピーマン等では尻腐れ果が発生しやすくなる。 このため、かん水管理に注意するとともに、定期的にカルシウム剤の葉面散布を行う。 育苗中期～後期は、施肥やかん水・葉かきなど、基本管理の徹底により苗の充実を図るとともに、後半は窒素肥料を切って植物体内の窒素濃度を低下させ、花芽分化を誘導する。 また、炭疽病を中心とした病虫害防除に努め健苗を養成する。
	ア かん水 天候と培養土の乾き具合をみて、苗が萎れない程度に1日に数回かん水する。自動かん水管理でも注意する。 イ 窒素肥料の中断 いちごは低温・短日条件で花芽分化するが、苗の体内窒素濃度を低下させることで、花芽分化が促進される。 窒素肥料を切る時期は作型によって異なり、無冷促成のポット育苗では8月中～下旬頃が目安となるが、ポットの大きさや育苗方法、品種等によっても異なるため、これらの条件に合わせて時期をずらす。 なお、「紅ほっぺ」は、育苗終盤に極端に肥料切れさせると、本ぽで芯止まり株の発生が懸念されるため、適切な肥培管理を行う。 ウ 小型ポットの根詰まり対策 小型ポット育苗では、育苗後半、ポット内に根が充満すると排水不良となり、根腐れや褐変が見られることがある。この場合は、一度ポットから苗を引き抜き、挿し直すと排水が良くなる。



写真1 トマトの尻腐れ果



写真2 ポット底面に根が詰まった状態

項 目	作 業 内 容
(4) 台風・豪雨 対策	エ 病虫害防除 炭疽病、ハダニ類などは、定植 までに防除を徹底し本ぼに持ち込ま ないように注意する。 台風襲来やそれに伴う豪雨に備えて、この時期は特に草勢維 持に努める。また、事前対策として施設の補強、防風網の設置、 排水溝の整備を行い、しっかりと茎葉の誘引を施す。事後対策 としては、ほ場内の排水を速やかに行う。豪雨被害を受けたほ 場については、損傷した茎葉の除去や摘果、疫病・炭疽病・軟 腐病等を対象に薬剤散布、液肥や尿素の葉面散布を行い、草勢 回復を図る。なお、強風、豪雨時のほ場の見回り事故を起こさ ないように危険回避に留意する。

(作成 農林水産研究所)